

国史跡「聖寿寺館跡」

受け継がれた戦国大名南部氏の遺産

令和9年（2027）4月オープン予定の「南部町歴史ミュージアム」。
ここでは、北東北最大の戦国大名であった南部氏の歴史を紐解くとともに、
国史跡聖寿寺館跡の出土品など、時を越えて受け継がれてきた
数多くの貴重な文化財を展示する予定です。

一 南部氏の系譜

南部氏は清和源氏に連なる一族です。初代南部光行は現在の山梨県（甲斐国南部郷）を本拠地とし、南部を名乗りました。

江戸時代に編さんされた『寛永諸家系図伝』には初代光行から28代重直までの当主が記されていますが、一部創作が認められるため、中には実在を立証できない当主も存在します。初代南部光行の当町への入部伝説もこの時に形作られたものと考えられます。しかし、近年は研究が進み、三戸南部氏は南北朝時代にこの地方を管轄した南部師行の系統ではないかと考えられるようになりました①。

二 聖寿寺館の当時の呼び名

火災によって文献が失われてしまった聖寿寺館の当時の呼び名はこれまで明らかではありませんでした。しかし、近年の調査・研究で、聖寿寺館中心建物跡の真下から出土していた

硯の底に刻まれていた「堀内」こそが当時の聖寿寺館の呼称であったと考えられるようになりました②。

京都相国寺管轄下の臨済宗僧侶で東北地方に派遣された幕府使節僧とみられる円福が八戸政経に宛てた、長禄4年（1460）頃の書状「円福書状」には、三戸南部氏当主とみられる人物の呼称として「堀内」が登場します。しかし、その名称が聖寿寺館出土の硯に線刻されていたことから、聖寿寺館そのものが「堀内」と呼ばれていた可能性が高く、硯は「堀内」に備えられた備品であったと考えられます。

三 調査が進む聖寿寺館

天文8年（1539）、24代南部晴政は上洛し、馬を献上、12代将軍足利義晴から「晴」の二字を賜ります。高級馬「戸立ちの馬」は都で珍重されており、南部氏は定期的に都に馬を献上していたものと考えられます。そのためか、三戸南部氏は室町・戦国期で都から最

も遠い地を支配していた領主であったにもかかわらず、発掘調査では都との強い結びつきと、当時の最先端技術の導入を示す発見が相次ぎました。

令和5年（2023）の調査では深さ7.4メートルに及ぶ巨大な堀跡の一部が姿を現しました③。堀底は2重になっており、敵を寄せ付けない工夫が施されていました。

この巨大な直線の堀で囲まれた空間は約300メートル×約180メートルの規模を有しますが、この「四角形の館」は室町幕府の足利将軍邸（京都）を頂点とする権威の象徴でもありました④。

居館規模としては、甲斐国の守護大名武田氏や六カ国の守護となった大内氏、九州の守護大名大友氏の居館は、どれも約200メートル四方ですので、聖寿寺館がこれらにまったく引けを取らない規模だったことがうかがえます。

また、聖寿寺館跡内部からは中央とのつながりを想起させるものも出土しました。その一

つが東日本で唯一の発見となった真鍮生産の痕跡です⑤。

現在、国立科学博物館（東京都台東区）と共同で聖寿寺館跡の貴重な出土品の調査・分析を進めています。分析により金属加工に用いた坩堝（くわく）付着の元素が特定され、金・銀・銅・真鍮などの多様な種類の金属を使って製品が加工されていたことが明らかとなりました。

特に聖寿寺館における真鍮生産の事実は大きな発見となりました。



③——発掘された堀跡



④——冬の聖寿寺館跡

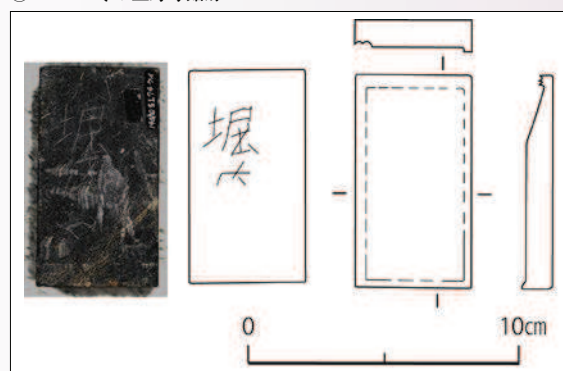


①——最新の研究成果に基づいた南部氏系図

⑦——聖寿寺館跡で出土した双六のサイコロとコマ



⑧——厩で双六を嗜む人々（『厩図屏風』東京国立博物館所蔵）



②——「堀内」と線刻された硯



⑤——東日本唯一の真鍮生産坩堝



⑥——『慕婦絵詞』（本願寺所蔵）と聖寿寺館跡出土の建具・調度品

真鍮は銅と亜鉛（あえん）の合金ですが、銅の融点が1085度であるのに対し、亜鉛の融点は419度、沸点は907度であるため、銅を溶かすために炉の温度を上げると、亜鉛は立ちどころに蒸発してしまいます。そのため、真鍮を作るのは難しく、非常に高度な技術が必要とされました。南部氏は金属生産のための専門職人集団を中央から呼び寄せていたのです。

聖寿寺館の真鍮生産坩堝は16世紀前半の年代が考えられるため、美濃国守護土岐氏の鷺山仙道遺跡（岐阜県）に次ぎ国内2番目に古いことが確認されています。16世紀初頭に中国から伝来したばかりの真鍮生産技術を、南部氏が国内でもかなり早い段階に取り入れていたことが明らかとなり、三戸南部氏の最新



⑨——町文化財に指定された本三戸八幡宮本殿



⑩——史跡ガイド



⑫——布施和洋総括主査（南部町歴史ミュージアム内で）



⑪——聖寿寺館跡御城印

技術を求める積極性がうかがえます。

また、これまで謎に包まれていた城館中心部の御殿内部の様相についても明らかにしつつあります。襖の引手金具や屏風の金具など、建具や調度品についても金鍍金が施されていたことが明らかとなりました。掛軸や屏風、香炉などの座敷飾りが施された上、彩色画の襖絵で設えられた部屋が存在が想定され、南部氏のゴージャスな生活空間がうかがわれます。『慕婦絵詞』という西本願寺3世覚如上人の伝記を記した絵巻物は、当時の上流階級の室内空間を類推する上で参考となります。実際に聖寿寺館にもこのような都鄙りな空間が広がっていた可能性が高いと考えられます⑥。

また、近年の調査では、動物骨製のサイコロとコマも確認され、居館内部で囲碁や連歌と

ともに双六遊びも行われていたことが明らかとなりました⑦。

聖寿寺館とはほぼ同時期に描かれた『厩図屏風』には、自慢の名馬が繋がれた観覧用の厩で、名馬を横目に双六や将棋、囲碁が執り行われている様子が描かれています。天下の名馬を多数携えていたと考えられる南部氏も、このような状況で双六遊びに興じていた可能性が想定されます⑧。

さらに、令和7年（2025）には山形大学と町との調査で三戸南部氏の氏神である本

三戸八幡宮の本殿が南部氏関連では最古級となる江戸時代初頭（慶長期）の建築であることが明らかとなり、町文化財に指定されました⑨。

四―史跡ガイド

平成31年（2019）、町内外の有志によつて発足した「南部屋形聖寿寺館ガイドの会」。町では毎年、ガイド養成講座を開催し、現在は19名が活動していますが、令和7年（2025）には初となる中学生ガイドが誕生しました⑩。

※ガイド申込は要予約。

五―南部御城印プロジェクト

お城版の「御朱印」である「御城印」を連携して販売するこのプロジェクトは、国内でも最大級の御城印連携の取り組みです。南部氏ゆかりのお城が存在する市町村等が連携し、南部氏のお城をPRしていく企画です。現在は東北3県18城館で連携しています⑪。

※聖寿寺館跡御城印は史跡聖寿寺館跡案内所で販売（1枚300円）。

（南部町教育委員会社会教育課史跡対策室・布施和洋⑫）